

東アジア言語文化学会 第2回大会 講演者・発表者の氏名・テーマ・要旨

2月19日(土)

【基調講演】

高橋弥守彦(大東文化大学・名誉教授)

テーマ：中日両言語の重複表現について

要旨：中国語の重複表現は意味上の重複“沉默寡言”と構造上の重複“无论……，无论……，更无论……”とに大別できる。どちらも文意を分かりやすくし、リズムを整える重要な要素となっている。日本語は重複表現をそのまま訳すと冗漫になるので、避けられる傾向にある。それでは、どのような理論に基づき、どのような日本語に訳せばよいのだろうか。

(1) 一路上多多沉默寡言，他知道自己做错了事。(『人民』89-1-99)

歩きながら多多はだまったままだ。自分が悪いことをしたのを知っていたからだ。

(同上)

(2) 像候鸟一样，在外的儿女都回到了家乡。无论路途远近，无论寒风细雨，更无论富贵与否。(『人民』15-1-78)

渡り鳥と同じように、外に住む子どもたちはみんなふるさとに戻ってくる。どれほど遠くにいようが、どれほど悪天候であろうが、ましてやお金のあるなしにかかわらず。(同上)

本発表では、先行研究と実例とに基づき、中日両国の重複表現が、一方ではよく使われ、一方では避けられる傾向にある理由を明らかにする。

呉川(日本大学・特任教授)

テーマ：万叶歌风论

要旨：和歌は日本文学の“压舱之宝”，也是日本精神文化的重要载体。本发表拟从宏观和微观两个方面论述《万叶集》在日本文学史、文化史上的定位及其歌风的美学特质。

一、《万叶集》堪称汉字文化圈最东端的一部文学经典，是日本文学的“压舱之宝”，对其后的和歌、物语文学以及其他艺术形式都产生了巨大影响。从文化史的角度来看，《万叶集》是日本皇室、皇族的文化和古代都市“雅文化”的结晶。不仅反映了古代律令制国家官人们的生活习俗、审美意识，还记录了各地的民风、民俗（如“东歌”、“防人歌”）。但因其通篇都是用“万叶假名”来表述，所以也留下了若干“千古之谜”。（如：歌集的名称、和歌总数、编纂过程及年代、作者、难训歌等）。此外，这部经典作为文化翻译、翻译文学研究的对象，也具有极高的研究价值（“七夕歌群”和七夕文化就是一个典型）。

二、“诚”（まこと）是日本古代文论与美学的重要概念之一，这个概念中既包含伦理的价值，也包含着艺术审美的价值。若是用一个词来概括“万叶歌风”的话，就是“诚”。万叶歌人的“诚”既是写实的“诚之物”，也是抒发真情的“诚之心”。本发表拟从“虔诚”、“忠诚”、“坦诚”、“真诚”这四个方面举出具体歌例进行考察。

【発表】

劉志穎(大連理工大学・院生)

テーマ：テンス・アスペクトから見る反事実文の日中対訳研究—「タラ」を中心に—

要 旨：日本語における複文の研究はすでに完備とは言えるが、中国語の複文の分類はいまだに明白にしていない。それは反事実対訳研究が進展しにくい原因の一つとされている。従来の反事実日中対訳研究は、定量学の視点を通して日本語原文から中国語訳文までという路線に沿って研究を行い、日本語と中国語の対訳関係が得られた。

しかし、日本語反事実文では、後件の「q」には、「qル」、「qタ」、「qテイル」、「qテイタ」という異なりがあり、それぞれ日本語反事実の解説（現在における反事実、過去における反事実、過去における反事実が未来・現在に影響を及ぼす）に影響を与えているが、中国語ではそういう明らかな標識がほとんどない。いわば、従来の研究は、反事実の意味達成に影響を与える変数が考えられておらず、得られた結果は対訳関係の片面しか見られない。本研究は、コーパスに基づいて、500 ペアの反事実の日中対訳例から「qル」、「qタ」、「qテイル」、「qテイタ」と日本語・中国語の対訳傾向を明らかにすることを試みることと、日本語における標識を通じて中国語の解説路線における標識を究明することにした。

趙蓉俊子(新潟大学・院生)

テーマ：日中語の移動補助動詞構文の対照研究

要 旨：現代日本語は「走っていく」「送ってきた」のような「Vていく」「Vてくる」という構造を持つ移動補助動詞構文がある。日本語記述文法研究会（2009: 130）によれば、「していく」「してくる」には、アスペクト的な意味機能と空間的移動を表す意味機能がある。現代日本語と対照的に、現代中国語では“带去”“持っていく”“寄来”“送ってくる”というような“V去”“V来”という構造を持つ移動補助動詞がある。

本発表では、「走っていく」「送ってきた」や“带去”“持っていく”“寄来”“送ってくる”のように、前項動詞(と略称する)が本動詞で、後接動詞(と略称する)が補助動詞であることを移動補助動詞構文と定義する。意味の観点から、は語彙の意味を表し、は文法的意思を表す。本発表では、日中語における移動補助動詞「Vていく」と“V去”、「Vてくる」と“V来”を対照することで、統語と意味の観点から日中両言語における移動補助動詞構文の相違点や特徴を明らかにする。なお、移動補助動詞構文に関する先行研究と問題点を記述した上で、日中語の移動補助動詞構文の意味機能と前項動詞の種類を考察する。

王玉芬(中山大学・院生)

テーマ：《红高粱》中的创造性搭配及其日译研究

要 旨：词语与词语之间符合语法规则，但又超出了词语之间语义内容和逻辑范畴的常规的搭配为创造性搭配，创造性搭配是一种非常值得关注的语言现象，它能够反映文本在语言、文体、

文化方面的特点,是体现作品文学性、艺术性和作者风格的关键所在。同时,也是跨文化翻译的一个难点,是译者需要谨慎处理的重要问题,若翻译得正确地道,不仅能使译文顺畅地被读者所理解,还能增加译文的可读性与艺术性,反之,则会使译文生涩难懂,或者失去原文的味道和可鉴赏性。《红高粱》是中国籍诺贝尔文学奖获得者莫言的代表作品,其日译本广受日本大众的接受与喜爱,这部作品一个重要的特点是在语言创造上进行了大胆的创新,其中突出表现在文中大量创造性搭配的运用上。本发表以日本翻译家井口晃翻译莫言作品《红高粱》为研究对象,对其中的创造性搭配的运用和日译情况进行考察,发现不同类型的创造性搭配具有不同的翻译策略;近半数的创造性搭配采取了直译的策略,保留了莫言生动大胆的语言风格,而对于语义不对等、语义韵截然相反、文化存在差异的创造性搭配则采取了意译、省译、加笔的策略将其改造为符合语义规范和在逻辑范围之内的常规搭配以保证译文的流畅性和自然度。

蘇秋韻(大東文化大学・研究員)

テーマ:“V 得过来/去”と“V 不过来/去”について

要 旨:本稿は先行研究を踏まえて、“V 得过来/去”と“V 不过来/去”を研究対象に、「肯定・否定」と「趨向補語“过来”・“过去”」という二つの角度から、その使い方を比較分析した。以上述べたことを次のようにまとめる。中国語の趨向補語“过来”、“过去”は基本的に具体的な空間における趨向移動を意味するが、メタファー的用法では、出来事が異なる段階に到達することを意味することができる。また、修飾される述語動詞が状態動詞であれば、連語は状況変化の可能性を意味しているが、「V」が動作動詞（継続動詞や瞬間動詞）であれば、連語は話者の動作と捉えやすい。

劉麗梅(广东外语外贸大学・院生)

テーマ:AV 型二字漢語動詞の自他に関する中日対照研究

要 旨:中日両言語において、同形漢語が数多く存在している。しかし、字形が同じでも、両者は常に同じ意味・同一文法的振る舞いを持つとは限らない。言葉の変遷によって、日本語の漢語は中国語の漢語とは異なる品詞性を持つようになった。中日において共に AV 型同形漢語動詞に属する語彙の中でも、「中:冷笑(自動詞) 日:冷笑(他動詞)」のように意味が同じだとしてもそれぞれ中日両言語の自他性が違っている場合もある。その自他性の相違を明らかにしないと、中国語母語話者は母語知識に基づいて意味のズレと用法のズレで AV 型同形漢語を誤用してしまう可能性がある。

本発表は主に語構成という視点から「A+V」中日両言語における AV 型同形二字漢語動詞の自他性を考察して AV 型同形二字漢語の中日対照研究を行う。中国語に属する AV 型漢語動詞を基にして、それに対応する日本語の二字漢語と対照分析をし、同じ漢語は中国語であるときの自他性と日本語であるときの自他性の異同、相違の発生原因を明らかにする。また、後置「V」の自他性変化が「AV」本動詞の自他性変化への影響も明らかにしたい。

王鼎(苏州大学・助教授)

テーマ：中日漢詩・漢文における「鯨」について

要 旨：2019 年に中国の科学研究費重点プロジェクトとして「日本漢字語コーパス建設とその研究」が採択され、2022 年現在「中国詩文詞賦集サブコーパス β 版」と「日本漢詩文集サブコーパス β 版」が公開されている。本発表は、「中日漢詩・漢文における「鯨」について」と題し、「鯨」の両国の詩文における使用状況を明らかにする一方、その共通点と相違点を分析すると同時に、いかにこのコーパスを検索・デキストマイニングに使うかを実演する。

張維薇(四川大学・助教授)

テーマ：阿倍仲麻呂における在唐社交の一考察

要 旨：本論考では、阿倍仲麻呂の在唐時の活動に触れる詩文を取り上げる先行研究を踏まえ、当時の史料から仲麻呂の在唐生活の実態を覗かせる有力な手掛かりを探ろうとするとともに、仲麻呂の交流関係の実態を考察する。特に翰林学士李白、詩人並びに官吏の儲光羲、王維、包佶などとの行き来を中心に、彼らの出会いまた行き来のルート、そして友、同僚、同窓としての関係の程度についての私見を述べ、仲麻呂の在唐活動の事情を一步進んで明らかにする。これらの史実を考察することにより、仲麻呂の唐知識人階層の社交分野において幅広い活躍や交友の事情を検討し、その唐における社交界の構造、並びにその社交立場と身分なども覗く。

劉嫦雲(広島大学・院生)

テーマ：日本煎茶道における中国明清文人茶の受容

要 旨：明清文人茶源于明朝中后期，当时中国的饮茶方式已经由宋代精致繁复的点茶法改为自然简朴的泡茶法。以江南一带为中心的城市社会 and 商品经济得到了快速的发展，由此催生了社会意识和风俗民情的变化，程朱理学日渐式微，阳明心学的“格物致知、知行合一”理论的兴起使文人们在追求物质享受的同时，也意识到舒放自我个性、追求精神上的闲适和愉悦。这一时期以江浙一带为中心开始出现文人茶人团体，他们把日常的茶事和自身的审美追求、文化理想和精神内涵结合起来，以茶为媒介，著述茶书、以茶入诗、以茶入画、以茶会友，使品茶生活具有浓郁的文化气质和精神内涵，把日常茶事上升到艺术审美的高度。这一时期的茶书、茶诗画通过长崎贸易和茶器具一起传入日本，为日本煎茶道的成立提供了理论指导和物质基础。本文拟从日本煎茶道相关研究的基础上，结合茶文化学、历史、艺术等多学科文献相关的叙述和记录，从茶书、茶器、茶会、精神内涵等角度，考察中国明清文人茶在日本煎茶道成立过程中如何被接受和吸收并与日本文化相融合。

郎松雪(東北石油大學・講師)

テーマ：松本萬年《參訂劉向列女伝》多元价值探讨

要 旨：《劉向列女傳》是中國文獻學鼻祖劉向根據《詩經》《尚書》所載賢妃、貞婦等歷史史料撰寫的中國第一部女性紀傳體文學作品。此書奈良-平安時代東傳日本，歷經近 1300 的發展，已經成為日本漢學研究的重要組成部分。日本國立國會圖書館藏松本萬年標註《參訂劉向列女傳》三卷本，是明治十一年(1878)，東京書肆別所平七出版發行。此本以承應二年(1653)，小島弥左卫門翻刻明代胡文煥校、黃希周續的善本為底本，共標註婦德傳記 135 傳（《新刻列女傳》6 卷 54 傳；《續列女傳》81 傳）。松本萬年標註本具有以下價值：第一，從版本學角度講，松本萬年標註本選用明代善本、日本和刻本為底本，雖然內容上有芟煩節取，但是具有珍貴與可信雙重價值，能夠彌補當時市場鬻賣《列女傳》版本低俗的缺陷。同時，松本萬年標註本是明治初期，《劉向列女傳》日本版本接續研究的重要代表。從書籍傳播與受容角度，《列女傳》1300 年的傳播歷程，經過了吸收、模仿的舶來文化過程，也經歷了改寫、創新的本土化過程，甚至形成日本聞名世界的女訓文化。從日本女子教育角度，松本萬年標註本作為日本女子教育的教材，用大量儒家的男尊女卑、三從四德、三綱五常思想來引導與規範女子行為、思想，實現了從根本上約束婦女、提倡婦德的教育效果，這對日本近世女性生活都產生了深遠的影響。

李諾(對外經濟貿易大學・院生)

テーマ：《申報》中日語借詞“參政”的受容過程研究（『申報』における日本語借用語「參政」の受容過程について）

要 旨：“參政”屬於有中國古籍出典，在日本明治社會中被賦予新義又傳入漢語的日語借詞。它的舊義為官職名稱，如宋代參知政事的省稱等；新義為參加政治活動。《申報》創刊於 1872 年（明治 5 年），是中國近代創辦最早，存續時間最長的日報，在引進日語借詞的過程中曾發揮了重要作用。因此為了明晰“參政”一詞在近代被中國人吸收與使用的過程，本文以《申報》（1872-1949）為研究文本，首先對《申報》中“參政”一詞的 14427 條用例進行抽取和分析，其次根據當時的社會背景及其使用情況將“參政”用例的使用階段劃分為新義萌芽期（1874-1911 年）、新舊義混用的新義擴張期（1912-1926 年）和舊義逐漸消亡的新義固定期（1927-1949 年）。最後，結合時代背景分析每一階段的特点及其成因。分析發現：第一在新義萌芽期，“參政”新義的用例最早出現在 1905 年。此後呈現快速增加趨勢，在 1908 年達到峰值為 84 條。這樣的變化趨勢與清政府預備立憲和設立咨議局具有密切聯繫；第二在新舊義混用的新義擴張期，由於袁世凱、段祺瑞制定的參政院官職制度使得“參政”舊義呈現兩次“死灰復燃”的現象；第三在舊義逐漸走向消亡的新義固定期，國民黨組織國民參政機關、中國共產黨與各民主黨派掀起的兩次憲政運動等都促進了社會上對於人民參政的廣泛討論。總之，“參政”的新義取代舊義並不是一蹴而就的，二者漫長的“博弈”如實地反映了中國擺脫專制政治與發展民主思想艱難發展的歷程，同時“參政”的新義由萌芽到穩固，也顯示出當今我國政治民主化的巨大成果。

柳宇星(日本大學・非常勤講師)

テーマ：日本語における「曖昧表現」の文化的背景に関する研究—異文化の視点から—

要 旨：先行研究では、「農耕文化」「海洋文化」「大陸文化」など「曖昧表現」の文化背景としての研究が盛んに行われている。しかし、このようなことは本人が「曖昧表現」を形成する理由になるかどうか疑問と関心を持った。本研究では、中国人の日本語学習者を対象としたアンケート調査を行った、日本人の中国語学習者を対象に、インタビュー分析、及び中国人の日本語学習者を対象にした模擬授業の記録映像資料分析という三つの手法を用い、日本語の「曖昧表現」がどのように使われているかを考察し、日本人の「曖昧表現」はどのような文化的背景から形成されたのかを検討した。「曖昧表現」については、たくさんの分野に分けられるが、本研究は主に「拒否表現」を中心として分析、考察を行った。さらに、「曖昧表現」と翻訳・通訳、「曖昧表現」と言語教育も論述した。今後は「曖昧表現」の背景にある日中文化の相違点の比較を中心とし、文化の違いも調べ、中でも日本社会に特有な「世間」をもっと深く研究してみたい。さまざまな原因、文化などの違いを研究することによって、中国人の日本語学習、日本人の中国語学習双方の言語習得に生かしていきたいと考えている。

賈麗娜(上海外国語大学・院生)

テーマ：国家领导人讲话外宣日文译本中的中国国家形象研究—基于《建党百年讲话》与《十九大报告》

要 旨：国家形象是一个国家的外交名片，很大程度上体现着该国的软实力。英国经济学家博尔丁（1959）最早提出，国家形象“是一个国家对自己的认知，以及国际体系中其他行为体对它的认知的结合，是一系列信息输入和输出产生的结果”。也就是说国家形象包括自塑形象和他塑形象两个方面。相比后者的被动性和不确定性，有时甚至包含其他意识形态的种种误解，自塑形象的主动权掌握在自己手中，构建良好的国家形象往往关系着国家的发展和民族的复兴。因此国家自塑形象研究一直受到学界关注。总的说来学界关于国家自塑形象的研究对象涉及多个方面，其中对于外文译本的研究成果也比较丰富，不过多为英文译本，日文译本极为少见。鉴于此，本文依据费尔克劳的批评话语分析理论，从高频名词、关键词和相关索引行的分析以及情态表达的应用等角度切入，分析《建党百年讲话》和《十九大报告》日译本的语言特征及其构建的中国国家形象。

張永嬌(上海大学・講師)

テーマ：雑誌『銅鑼』における宮澤賢治テキストの位置づけ

要 旨：近年に戦前・戦時中の中国における宮澤賢治の受容に注目し、侵略や殖民に利用された賢治テキストの有り様がしばしば提起されている。一方、中国における宮澤賢治の受容の始まりを言えば、1924年に赤木三郎は中国広州の嶺南大学で留学中の草野心平に『春と修羅』を送ったことに遡る。草野心平の絶賛の上、広州における文芸活動に宮澤賢治も参与させたとのことである。宮澤賢治の生前に童話集と詩集を自費で刊行したが、文芸雑誌における投稿の経歴が少なかった。詩集刊行の直後に、日本の詩壇には辻潤や佐藤惣之助などが

賛美したが、大きな反響を帯び起こすことがなかった。同時に、中国広州において草野心平の絶賛によって、文芸雑誌の同人になったり、『春と修羅』の一部を手入れして投稿したりすることは1925年から1927年まで継続していた。その日本の文壇と外地での受容の温度差とあり方は極めて重要な論題である。本論は誌面分析によって雑誌『銅鑼』の性格とその中に宮澤賢治テキストの位置づけを明らかにすることを試みたい。

2月20日(日)

【発表】

趙海城(明星大学・教授)

テーマ：中国語母語日本語学習者の副詞の使用傾向－日本語母語話者との比較を通して－
要 旨：学習者の中間言語対照分析(contrastive interlanguage analysis : CIA)では、母語話者による第一言語(L1)産出と学習者による第二言語(L2)産出が比較され、これにより学習者特有の過剰使用(overuse)、過小使用(underuse)、誤用(misuse)などが特定される(石川2012)。過剰使用や過小使用は、学習者のL2使用や、L2習得の過程を検討する新たな視点を提供してくれる。

本発表は「JCK 作文コーパス」「YNU 書き言葉コーパス」を用いて、日本母語話者と比較しながら、中国語母語日本語学習者の副詞の使用傾向について、特徴度という統計指標を用いて考察を行った。その結果、日本語母語話者に比べ、中国語母語日本語学習者は「若し、段々、全然、もっと、ずっと、一番、もう、最も、込も、多分、色々、唯、例えば、随分、一寸、必ず、一杯、どう、がっかり、一体、暫く、沢山、はっきり、漸と、良く、生憎、一旦、無理矢理、もちもち、詰まり、特に、元々、何とぞ、丁度」などを過剰に使用し、「全く、数多く、かなり、こう、是非、寧ろ、恐らく、大抵、そう、兎に角、矢張り、又、未だ未だ、遂に、まあ、確り、きちんと、仲良く」などを過少使用している傾向が見られた。また、過少使用語にはいわゆる「非用」傾向が強い語が見られる。

王丹丹(唐山師範学院・講師)

テーマ：オンライン言語行動における「助言」の日中対照研究

要 旨：助言は日常的なコミュニケーションにおいてなされる言語行動の一つである。人は何か困ったことがあるとき、他者に助けを求め、解決方法を得る。オンラインコミュニケーションの発展に伴い、現在、オンラインで悩みや困難な問題について質問を発信し、世界中の見知らぬ人たちから多くの解決のための知識や助言を得る方法が広まっている。オンラインでは、質問する人も回答する人もお互いの年齢や性別、国、人生経験などがわからないままコミュニケーションを進めている。

近年、オンライン言語行動についての研究が多くなされ、特に日本語では、金水(2003; 2007; 2011)などによるオンライン言語行動における役割語に関する研究が盛んに行われており、多くの成果が挙げられている。しかし、他のオンライン言語行動についてはあまり研

究されていないのが現状である。そのため、本研究は日本と中国のウェブサイトから「助言」という言語行動のデータを収集し、日中両言語のオンライン言語行動における「助言行動」にどのような共通点と相違点があるかを明らかにする。

王冠亮(南山大学・院生)

テーマ：学習者はなぜ有対自動詞をうまく使えないのか

要 旨：日本語学習者の有対自動詞の習得研究は 90 年代から行われ、「結果状態が注目される自動詞文」の習得は難しいとされている。しかし、先行研究でのデータ収集はほぼ多肢選択、もしくは穴埋め問題でなされており、学習者の運用データへの関心は低い。コーパスを用いた研究もあるが、学習者の内面に迫るのは難しい。本研究では発話誘出タスクで得られた運用データとフォローアップ・インタビューを基に、学習者の有対自動詞の運用とその内面にある中間言語の規則について分析した。

その結果、「結果状態が注目される自動詞文」の習得が困難である原因は①“「対のある自動詞」の習得全般に関わるもの”と②“「結果状態が注目される自動詞文」に関わるもの”に分かれた。具体的に、①には「動詞を思い浮かべない」、「対の片方だけ思い出せる」、「形態的な違いが分からない」、「意味的な違いが分からない」、「語彙レベルの母語の影響」などがあり、②には学習者が自ら立てた不適切な中間言語仮説を手がかりにし言語運用時に繰り返し仮説を検証したことなどがあった。また、学習者が立てた仮説は複数あることことも判明した。

張心悦(京都大学・院生)

テーマ：RPG ゲームを利用した日中交流による会話練習の効果—学習者の会話能力の成長を中心に—

要 旨：近年日本のポップカルチャーのアニメ・コミック・ゲーム (ACG) 文化は人気と影響力が急成長を遂げ、ACG 文化に興味のある人が益々増えてきている。張 (2019) は、RPG ゲームは日本語の言語知識と聴解に学習効果があると証明してきた。一方、RPG ゲームの視聴による会話練習はなく、会話能力への貢献が見られなかった。一方、教育現場において、学習者が会話練習の機会が少なく、母語話者との交流の機会は減多にない。日中交流を促進するためにも、学習者が同世代日本語母語話者と接触し、交流の機会を増やす必要がある。

以上の背景から、本研究では、RPG ゲームを利用した日中交流による会話能力への効果を明らかにすることを目的とする。具体的には、まず事前テストを行った。その後、学習者に RPG ゲームを遊んでもらい、毎週あらすじと感想をまとめてもらった。その後、2 週間ごとに、オンラインで、同じゲームを遊んでいた日本人大学生と 5 人グループで話し合ってもらった。その後、各自に評価シートを記入し、自分と他の参加者のいい所と改善点を記入してもらった。12 週の間繰り返して行った。その後、事後テストを行った。本発表では、RPG ゲームを利用したグループワークによる会話学習の効果及び課題を説明する。

李静・李楚楚(信陽師範学院・講師)

テーマ：日语多义拟声拟态词的语义分析——以「どろどろ」为例

要 旨：据国立国語研究所の統計，日本人最为常用的拟声拟态词数量有 500 个左右。而笔者通过对国内高校日语教材《综合日语》(共 6 册) 的初步调查，发现拟声拟态词的数量仅 77 个，且多义拟声拟态词的出现频率并不高。即使在教材中出现的多义拟声拟态词，但是其词义也集中在一个方面，例句缺乏灵活性，没有展现出多义拟声拟态词的整体构造和词义用法的多样性。所以本论文选取常用教材《综合日语》(共 6 册) 中的多义拟声拟态词「どろどろ」，运用认知语言学的理论，基于日常生活中的反复发生的经验，将其作为理解拟声拟态词的基础，通过理想认知模式论述拟声拟态词的比喻扩张。同时分析其多个义项之间的联系，旨在帮助中国日语学习者构建高效学习多义拟声拟态词的语义网络。

崔競文(筑波大学・院生)

テーマ：外来語前進型アクセントの形成—軽音節外来語を例にして—

要 旨：日本語の外来語の中には、アクセント核が語頭の方向へ移動するタイプが見られる。このタイプのアクセントでは、語末から数えて 2 つ目のフットの中にアクセント核が置かれる。たとえば、「(ア)ド)(バイ)ス」においては、語末から数えて 2 つ目のフットとは「(アド)」を指し、そこでアクセント (「」で記す) が付与されている。このようなアクセントの形成は、今までの先行研究の知見を以ても説明できない。本研究発表では、このアクセント型を「前進型」と呼び、軽音節構造の外来語を中心にして前進型が形成される仕組みを明らかにする。

具体的に、「コ(ロ)シ)(アム)」や「(カ)リ)キュ(ラム)」においては、すべての音節が 1 モーラの重さを持ち、かつ語末から 2 番目のフットにアクセントが置かれる。本発表では、この軽音節構造における前進型の形成は、語末の挿入母音及び NonFin(Ft)制約に関係すると考える。つまり、前進型外来語の語末音節にはほとんど挿入母音を含んでいるため、語末に連続する軽音節が擬似的な重音節として振る舞っている。この構造で構成されるフットが語末に隣接しているため、NonFin(Ft)制約が作用している。この制約は、語末に位置するフットにアクセント核を付与することを禁じることで、アクセントが前進化して次語末のフットに付与されるということになる。

劉珊珊(広東外語外貿大学・院生)

テーマ：多義形容詞「厚い」・「薄い」が意味拡張による非対称現象について

要 旨：われわれは空間の中に身をおいて生活しており、空間に関わる様々な情報が、日常生活の経験的な基盤を背景として機能している。＜遠近＞、＜高低＞、＜深浅＞、＜長短＞、＜大小＞、＜厚薄＞などのさまざまな次元は、文字通りの空間叙述にかかわるだけではなく、より抽象的な概念領域の叙述にも比喩的に拡張されている。また、もともとペアになっている

る反対語は、常に一連の拡張によって非対称関係を持つようになった。したがって、簡単な次元形容詞なのに、日本語学習者にとって難しくなり、誤用しやすくなった。

本稿は先行研究を踏まえて、反対語「薄い/厚い」のプロトタイプ意味と拡張した意味をまとめる。その上、コーパス「NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)」(1.30 版)を利用して、叙述パターン「…が薄い/厚い」の例を抽出し、「薄い」「厚い」との共起成分を収集・分類し、各用法の出現頻度について調査を行い、頻度がより高い成分の特徴を考察する。それによって、「薄い」「厚い」の語義上、また使用上の類似点と相違点を示し非対称性を分析する。

高甜(東京外国語大学・院生)

テーマ：談話における文末形式「ノダ」－参照点構造の観点から－

要 旨：ノダの文は「～は～だ」という主題－解説型の構文で、その中心的な機能は「説明」を表すということが知られている（山口 1975, 田野村 1990, 野田 1997 など）。一方、どこまで、何を主題として捉えるかについては、検討の余地がある。

- (1)外で音がする。雨が降っているのだ。(先行文)
- (2)外で音がする。(やっぱり) 雨は降っているのだ。(先行文/「雨」)
- (3)実はぼくもその村の出身なんだ。(気持ち?)

本発表は談話に現れる文末のノダを対象とする。目的は、ノダ文におけるいわゆる主題を参照点構造 (Reference-point Constructions : Langacker 1993)の観点から考察し、ノダの意味構造を捉え直すことである。そして、参照点構造モデルをそのまま採用せず、モノ参照点とコト参照点に分け、参照点構文の類型化のもとに、ノダ文をどう位置づけるかという考察を行った。分析の結果は次のとおりである。

- ①ノダの意味構造は参照点構造をベースにしつつ、目標をマークする。ノダ文は、いわゆる主題を参照点として持ち出し、その支配域の中からノダ文を目標として選び、そこへ注意が移行していくという参照点構文として捉えられる。
- ②ノダ文における参照点は、モノとコトに分けられる。モノ参照点構文は目標がプロファイルされるが、コト参照点構文は関係全体がプロファイルされるため、両者はプロファイル・シフトによって意味の連続性を保つ。
- ③ノダ文はコト参照点構文として位置づけられる。これは際立ちの原則には反するが、「コト」指向の日本語の好み（池上 1981）とは一致する。

林楽青・楊玖澄(大連理工大学・助教授)

テーマ：マルチモーダル談話分析の視点からみるマイクロレクチャーにおけるメディアの役割－中国外国語マイクロレクチャー大会の受賞作品を対象に－

要 旨：微课的实质是多模态语篇。作为一种依托于互联网的新教学形式，微课强调多媒体工具的选择及使用。微课主要借助视觉模态发挥作用，通过“观看”获得“教学”这一交际过程的信息。本文研究承载视觉模态的多媒体工具是否有利于微课交际过程的信息传递，以第一届至第六届中国外语微课大赛日语组所有获奖视频为研究对象，考察其中承载视觉模态的多媒体工

具（图片、动画及视频）的使用情况，探讨其对于日语教学的意义。

馮俊苗(西安交通大学・院生)

テーマ：高校日本語教師の職業ストレス構成研究—JDCS モデルに基づいて

要 旨：本研究基于高中日语教师日益增长的现状，分析其工作压力的构成和内涵。首先基于 PAC 分析调查了四名高中日语教师，抽出了以往研究中未涉及的压力项目。其次，在此基础上编制针对高中日语教师的压力量表，通过问卷调查分析，提取出高中日语教师压力来源的 7 个因子：“教师专业能力与教材”、“学生”、“人际支持”、“工作负荷及其影响”、“学校管理”、“职业发展”、“评价方式”，并基于教师属性（所属学校、教龄、学历等）对压力的差异化倾向进行了分析。最后，讨论高中日语教师的压力内涵和产生原因，并结合工作压力模型理论(JDCS 模型理论)指出目前高中日语教师处于“高要求-低控制-低社会支持”的高压力工作状态。

徐義紅(大連交通大学・講師)

テーマ：日本語の作文授業における協働学習の実践とその問題点

要 旨：従来から日本語の作文授業は授業内容と形式が単調であり、学習者が授業に興味を持てないため、書く意欲が低かったり、指導教師にとっても添削量が多く、負担が大きいなどの問題が存在している。この状況を改善するために、筆者は作文の授業に協働学習を取り入れた。本稿ではその実践の結果と問題点を纏めた。まずは、作文授業の現状について、三つの方面から分析した。(1) 授業時間の不足。(2) 教材の難易度と作文授業の現状の不相応。(3) 指導教師の添削の負担の大きさ。次に、協働学習の実践過程を紹介した。結論から言う、作文の授業に活気がつき、学生の書く意欲も高まった。一方で、教師の添削量も減り、負担がある程度小さくなった。しかし、グループ発表の時間管理、教師添削への過度の依存及び評価方法などの問題について、さらに改善する必要があることがわかった。今後の課題として、以上の問題を解決するために、内容の深まりを目指す指導法を研究したいと思っている。

高娟(常州工学院・講師)

テーマ：日本語の教科書における複合動詞の取り扱いについて

要 旨：日本語の複合動詞は日本人の生活の中でよく使用されている。日本語教育ではその習得が必要であるにもかかわらず、学習困難な項目であることがよく指摘されている。

本研究では、中国人学習者の複合動詞の使用実態を明らかにするため、日本語の教科書における複合動詞の使用状況を調べることにする。具体的な調査方法としては、現在中国国内で刊行されている 3 種類の教科書を分析の対象とした。影山（1993）と姫野（2001）の複合動詞の分類基準に踏まえ、複合動詞を語彙的複合動詞と統語的複合動詞に分け、その提出基準や分布状況などの実態を明らかにする。

調査の結果としては、3 種類の教科書においては、統語的複合動詞は体系的に扱われてい

るが、語彙的複合動詞は単語として提示されている。また、多義的複合動詞の中国語意味の注釈が非常に不十分であることなどの問題点が発見できる。

姚伟丽(黒竜江大学・院生)

テーマ：日本語能力試験にみられる文化的意味の捉え方について ―「即時応答」問題をめぐって

要 旨：日本語は、日本文化を理解するための一番重要な道具だといわれている。日本語能力試験は日本語を母語としない人たちの日本語能力を測定し認定する試験として、現在は世界最大規模の日本語の試験となっている。2010 年から日本語能力試験は内容が改定され、新しい日本語能力試験となっている。そして聴解の点数は全体の四分の一から三分の一を占めるようになった。聴解の内容のひとつとして新しく設定されたのは会話能力をチェックするための「即時応答」である。会話は短くて、しかも、問題用紙に選択肢が印刷されていないため、学生たちがかなり困っているようである。即時応答という問題の場面として日常生活、学生生活、職場における頼み、願い、許可などがあげられる。文法上では、敬語の使い、授受表現のほかに日本人ならではの慣用表現が主な内容である。これらはいずれも日本文化の表れであり、日本人特有の考え方がわからない限り、正確に答えるのは難しいのである。

本稿では、日本語能力試験三級の「即時応答」問題を中心に、その問題を分類し、その裏にある文化的な意味を追及しながら、その答え方について提案する。

孫楊・金月(揚州大学・助教授)

テーマ：中日の「不満」言語行為談話に関する一考察―中日のホテルウェブ上に書き込みの比較を中心に―

要 旨：本研究は中日のホテルウェブ上の書き込みに見られる「不満」言語行為談話を考察対象とし、中日の母語話者が「不満」言語行為談話のストラテジーの使用状況について考察した。

本研究は、中日両国の人気ウェブで、ホテルの所在地、価額などの要素を考慮した上で、それぞれ 10 のホテルを選んだ。そして、10 のホテルの一年間(2015 年 3 月―2016 年 2 月)の投宿後の口コミをデータとし、分析していた。本研究が宇佐美まゆみ(2002)の DP 理論に基づき、張恵芳・顧心玉(2013)の「話題導入」、「状況提供」、「要求提出」、「意向表明」の分類を援用し、中、日母語話者がホテルに「不満」を表す時の談話の構造及び各構造に用いたストラテジーを明らかにした。

1. 「不満」言語行為談話の構造に、中国語母語話者は「状況提供」の使用頻度が「不満」言語行為談話構造の組み合わせに一番高い。一方、日本語母語話者は「話題導入＋状況提供」の談話構造の組み合わせを多用している。中、日母語話者が用いた「不満」言語行為談話構造の組み合わせを比較すると、日本語母語話者の用いた談話構造の組み合わせが中国語母

語話者より豊富である。

2. ①「話題導入」部分は、「注意喚起」、「投宿原因」、「投宿期間」、②「状況提供」部分は、「情報感覚」、「他人評価」、「他店比較」、「理由提示」、「容赦表示」、「相手誉め」、③「要求提出」部分は、「直接要求」、「間接要求」、「改善結果」、④「意向表明」部分は、「直接表明」と「将来計画」、にそれぞれ下位分類できる。

3. 中日「不満」言語行為談話のストラテジーから「基本状態」を抽出し、結果は以下のようである。

中国語：注意喚起（話題導入）——情報感覚（状況提供）——直接要求（要求提出）——直接表明（意向表明）、

日本語：投宿原因（話題導入）——相手誉め（状況提供）——改善結果（要求提出）——直接表明（意向表明）

「不満」言語行為の「基本状態」では、両話者ともに「直接表明」というストラテジーを多く使用しているが、他のストラテジーの使用が異なっている。両話者の相違点は、中国語母語話者は直接的な「不満」を用いていることに対して、日本語母語話者が婉曲的なストラテジーを用いている。

呂芳(立命館大学・嘱託講師)

テーマ：中国語を母語とする日本語学習者における格助詞「ニ」の脱落について—形式名詞に後接する「ニ」の脱落を中心に—

要 旨：本研究は本来「ニ」を使用すべき箇所に使われていないことを「脱落」という。

『YUK タグ付きの中国語母語話者日本語学習者の誤用コーパス』Ver.12（以下、「YUK コーパス」と略記）から抽出したデータを基に、中国語を母語とする日本語学習者の「ニ」の脱落、特に形式名詞の後に続く格助詞「ニ」の脱落を中心に調べたものである。

「YUK コーパス」から検索したデータをまとめてみれば、脱落した「ニ」に前接する形式名詞のうち、「PときQ、PまえQ、PあいだQ」といった時間にかかわる形式名詞もあれば、また「PためQ、PうちQ」といった時間に関係のない形式名詞もある。

本研究では、上記のような形式名詞のあとの「ニ」の脱落現象を観察し、中国語を母語とする日本語学習者が「P+形式名詞ニ+Q」において、脱落した「ニ」に前接する形式名詞、またPとQにどのような特徴が見られるのか、学習者が「ニ」を脱落しないように「ニ」の使用条件を検討したい。

劉智俊(大連外国語大学・院生)

テーマ：原発危機に関するエビデンシャルティ研究

要 旨：近年、エビデンシャルティ研究はますます多くの言語学者に注目されている。エビデンシャルティ研究も最初に分類と形式を検討することから、異なる研究分野の言語学者がエビデンシャルティの言語機能を探求するまで拡張した。エビデンシャルティ

(evidentiality)は、情報源だけでなく、情報源の信頼度を表現するための言語形式にもつながる。このような言語形式を表現する文法カテゴリーをエビデンシャル(evidentials/evidential markers)と呼ばれる。本稿では、朝日新聞の社説における日本原発危機に関する社説をコーパスとし、エビデンシャルティ理論(Chafe 1986;Mushin 2001;Aikhenvald 2004)を使用して原発危機の社説のエビデンシャルティを考察する。本稿ではまず、原発危機の社説のテキストを時代ごとで考察する。即ち、民主党政権時代、自民政権時代のテキストを取り上げ、それぞれ、情報源とエビデンシャルを考察しながら内容分析を行う。その上で、時代の原発危機の社説におけるエビデンシャルティの観念構成的機能、対人関係的機能のディスコースの特徴と相違を考察する。以上の考察を通して、日本語ディスコースに対するエビデンシャルティ研究に新しい参考を与えればと思う。

栗原千里(日本大学・教授)

テーマ：「是～的」構文と已然義と過去の出来事に対して説明を加える文意について

要 旨：「是～的」の構文は現代中国語で常用される所であるが、既に起こった出来事について諸々の説明(時間、場所、手段等に対する説明)を加える場合に用いられる基本的表現方法として一般的に認識されている。要するに過去の出来事に対して説明を加える表現方法として広く認識されている訳であるが、その様な文意は「是～的」の構文の内に含まれる所の「已然義」に起因して成り立っているものである。当発表においてはその「是～的」の構文の内に含まれる已然義が「是～的」の構文の中より如何にして発生し、そしてその已然義が更に如何にして、一般的に認識されている様な過去の出来事に説明を加える文意に推移してゆき得るのか、例文を挙げつつ順を追って考えてゆきたいと思う。

趙鵬娜(遼寧師範大学・院生)

テーマ：少数民族地区の语言景观分析——以山西长治西街回族社区的饭店招牌为例

要 旨：语言景观研究近些年成为社会语言学的新兴研究热点和前沿领域。语言景观是城市风貌最直接的体现，是展现社区内部、地区乃至国家民族语言活力的重要载体。语言景观中的语言选择可以建立起对公共空间的控制，可以保持某种意识形态和某种语言的地位，进而影响“民族语言群体的积极地社会身份认同”(Ben-Rafael et al,2006)。回族作为我国少数民族之一，虽然作为其语言形式之一的阿语逐渐消失在历史的长河中，回族群体的日常用语已经发生汉化使用汉语和当地方言，但其作为伊斯兰文化的一种文化的象征，仍然被广泛应用于饭店招牌中。同时由于语言景观与社会语言环境具有双向互动关系，语言景观研究的实证研究也为当地城市语言政策和语言规划、城市规划和管理提供科学依据，有助于重塑社会语言环境。因此，本研究基于前人所提出的语言景观理论，以山西长治西街回族社区的饭店招牌为研究对象，尝试探究中部地区少数民族回族社区饭店标牌的特征与规律，分析其语言权势与回族文化认同，旨在完善该地区公共空间的语言景观构建，为构建构建和谐的社会语言生态环境助力。

胡春艷(東北石油大學・助教授)

テーマ：『紅樓夢』各版本における ABB 型形容詞重疊式の比較研究—前八十回を中心に—

要 旨：本稿は、『紅樓夢』前八十回各版本を言語資料として、各版本間の ABB 型形容詞重疊式の使用状況を比較するものである。通時的観点からみると、ABB 型形容詞重疊式は元明清時代に大きな発展を遂げている。曹雪芹が原著者とされる小説『紅樓夢』は、乾隆五十六年（1791）以前は写本で伝わってきたもので、それ以降、版本（刻本）として刊行されて社会に流布していく。現存するテキストの写本はすべていわゆる「脂硯齋本」で、11 種発現されている。

本稿は、主に「脂硯齋本」の「庚辰本」をテキストとして、その ABB 型形容詞重疊式について、ほかの 11 種の写本および「程乙本」刻本と比較対照し、各版本における ABB 型形容詞重疊式の使用状況を明らかにする。形容詞重疊式は程度性のみならず描写性と同時に主観性が高く、話者の表現の意図をよく表すとされる。ABB 型形容詞重疊式には、『紅樓夢』を初出とする語例があると考えられる。そこで本稿は各版本の ABB 型形容詞重疊式に関する記述の異同を精査することで、曹雪芹の言語的特徴に加え作品としての文学的特徴を検討し、さらに各版本の関係にも論及していきたい。